

## 第二展示室【自然科学・美術工芸】

### 【自然科学部門】

宮古諸島は、大小80余の島々が点在する琉球列島のほぼ中間に位置し、九州の大隅半島から約850km、台湾から約450km離れている。北緯24°30′から24°50′、東経125°10′から125°30′を結んだ範囲にある。

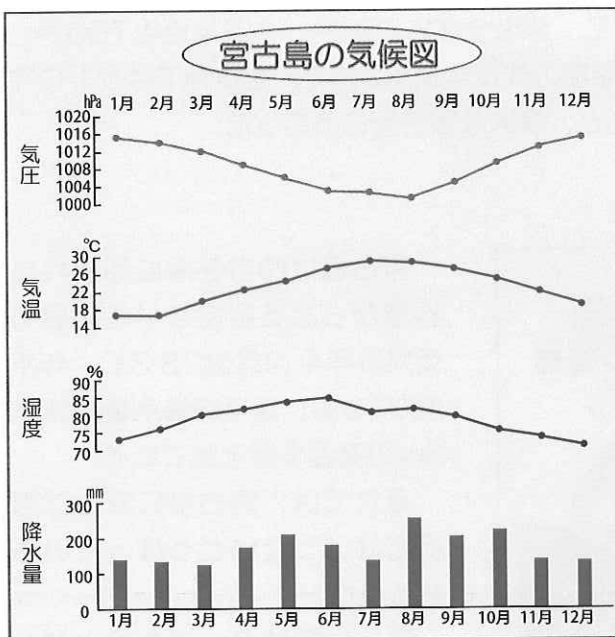
地層は大半が新世代第4紀に形成された琉球石灰岩におおわれ、その下に新第3紀鮮新世時代を中心に堆積した島尻層群と呼ばれる厚い地層がある。

気候は亜熱帯海洋性で黒潮の影響を強く受けている。

宮古諸島の生物相は地理的な位置、地史、島嶼性及び気候などによって特徴づけられる。宮古諸島からは、これまでに植物約740種、昆虫類約650種、両生・は虫類17種、鳥類330種、哺乳類8種が記録されている。

### ■宮古諸島の自然

#### 宮古の気候



宮古は高温多湿な亜熱帯海洋性気候に属し、年平均気温が23.3℃、年平均湿度は79%で四季を通して温暖な気候である。

年間を通じて1月～2月が最も寒く、最低気温は10～15℃である。5月中旬ごろから6月中旬ごろまでの梅雨があけると本格的な夏になり、9月ごろまで連日最高気温が30℃以上の暑さが続く。

夏から10月ごろにかけては台風シーズンで、9月ごろ強い台風が襲来する傾向にある。台風は農作物に大きな被害を与えるが、反面早魃（かんばつ）の際は恵みの雨をもたらすこともある。

10月ごろになると朝夕すずしくなり、

しのぎやすくなる。そのころ宮古の風物詩である渡り鳥サシバが群をなして飛来する。

サシバが南方に旅立ったあと、11月中旬ごろから北よりの季節風が強まり冬の到来となる。

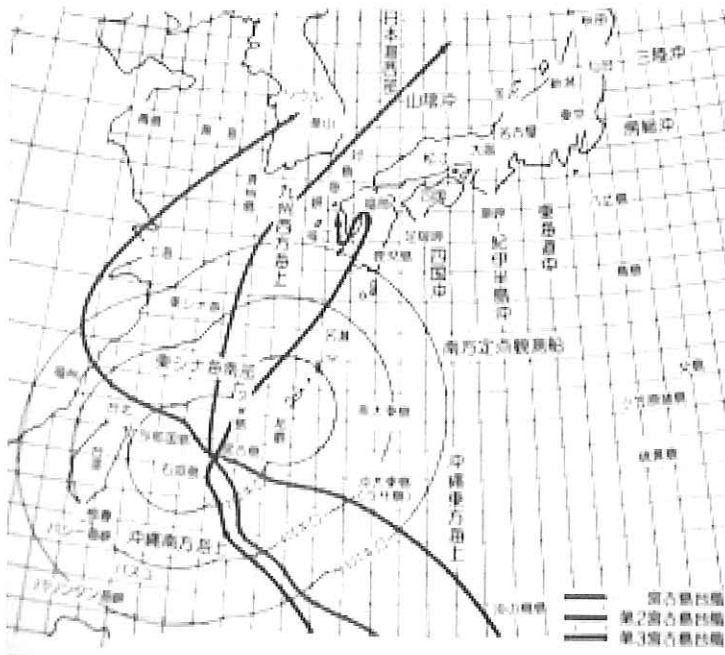
#### 第2宮古島台風

昭和41年8月29日3時サイパン島の北東海上に弱い熱帯低気圧が発生し、31日9時には台風18号となった。

この台風はコラ台風と名付けられ、9月15日10時ごろ宮古島の南西20kmまで接近した。



## 宮古島台風の進路図



測史上第1位を記録した。

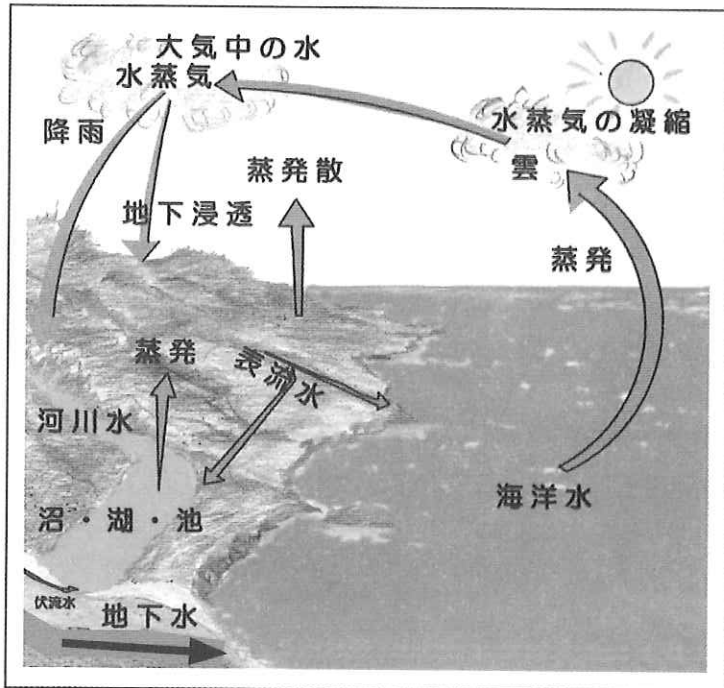
この台風で、宮古島では、重軽傷者41名、建物全壊2,756戸、住宅半壊4,756戸、非住宅全壊5,977戸、非住宅半壊2,634戸、船舶の沈没や流出2隻で、農作物ではサトウキビが40%、サツマイモが53%、野菜類100%と、多大な被害をこうむった。

宮古島付近での台風の動きは極端に遅く、平均時速8kmであった。このため、宮古島は台風の中心から半径50km以内に11時間、100km以内に21時間もさらされ、5日0時過ぎから25m/s以上の暴風雨が21時30分まで続いた。その間、40m/s以下になったのは、翌朝6時頃であった。

台風は、宮古島付近を通過した頃が最も勢いが強く、中心気圧918ヘクトパスカル、中心付近の最大風速は、65m/s、25メートル以上の暴風雨半径は200から250kmという猛烈な台風であった。

宮古島で観測した最大風速北東の85.3m/sは、日本の平地での気象観

## 水の循環



宮古島は四方を海に囲まれた石灰岩層からなる平坦な小さな島である。気候は年平均気温23.3℃、年平均湿度が79%、年平均降水量が約2019.3mmの高温多湿な島である。

それでは、宮古島に降った雨水の行方はいったいどうなっているのでしょうか。

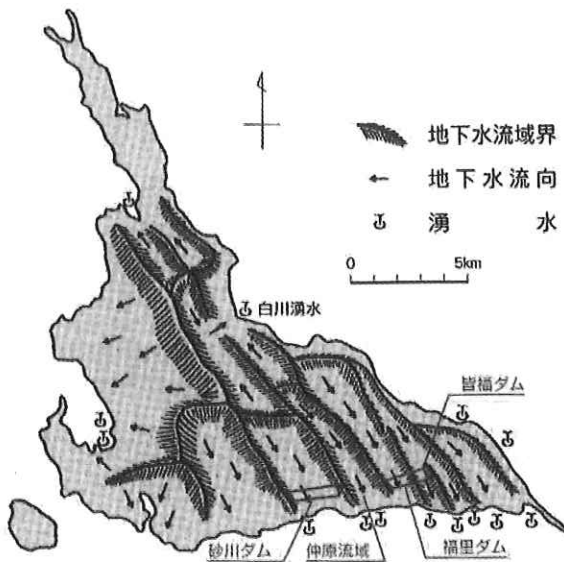
空には雲はあっても貯水タンクはない。海水や地表等から循環した水蒸気が自然のいろいろな働きで循環しているのである。水蒸気が上空で凝結して雲になり、さらに直径1mm以上の水滴になって再び海や地表に雨となって降るのである。宮古島に降

った雨水も約38%が自然に蒸発し、約20%が海へ流出、残り約42%が地下水となる。

地下水は地下の低いところを流れ、泉となって湧き出し、再び海へ流れていくのである。

このようにして、水は海水や地表から蒸発して水蒸気となり大気中で凝結し雲をつくり、雨となって地上へ降りそそぐ。地上に降った雨は地表を流れ地下水流となって海に流れ込んでいく。こうして水は循環を繰り返し宮古島の自然を潤しているのである。

### 宮古島の地下水盆



宮古島の地下谷（中西康博「サンゴの島の地下保全」より）

宮古島の雨の量は年間に約3,6億立方メートル達すると言われている。そのうち約半分に近い雨水が地表を流れ、地下へ浸透し、地下水として貯水される。どうして宮古島には貯水タンクのような地下水盆ができるのであろうか。

「水は方円の器に従う」と言われる。宮古島をその器にたとえると、宮古島の地形・地質の特徴に従って水は流れ、浸透し、貯水される。それは宮古島の次のような水利地質の仕組みに大きな特徴があるからである。

(1)他の地域と違って、透水性の大きな多孔質の琉球石灰岩やその風化土壌が広く分布している。(2)宮古島の基盤に不浸透性の粘土層が基盤岩になっていること。(3)隆起運動や断層運動によって、基盤岩や石灰岩を切断・褶曲（しゅうきょく）して壁をつくり、地下水盆状地形を作っている。

宮古島には5つの地下水盆群と23ヶ所の地下水盆がある。

### 宮古島の地下ダム

宮古島は、島全体が琉球石灰岩から成り、土壌は浅い上に保水力がない。そのため、毎年夏になると旱魃（かんばつ）の被害が出て農業の発展に大きな障害を来してきた。宮古島の地下ダムは、その阻害要因の根本的な解決を図るために造られたものである。

宮古島の年間降水量は約2019.3mmであるが、その42%が琉球石灰岩を浸透して地下水となる。この地下水は不浸透水性の粘土層に達して地下水盆を形成し、さらに地下水流となって海に流出する。

宮古島の地下ダムは、この地下水の流れている帯水層をコンクリートの壁で締め切り、地下水の海への流出をせき止めて水位を上げ、さらにその水をポンプで汲（く）み揚げて畑地に供給利用しようというものである。

地下ダムの特徴としては、河川などの水とは関係なく、降雨による地下浸透によって貯水が可能であること。集落や耕地を失うことなく、地表がそのまま使えること。河川ダムに起こりやすい、管理ミスなどによる人工的災害や自然的災害がほとんどなく安全であること等があげられる。

## ■宮古諸島の生い立ち

### 1. 島尻海の誕生

新生代第3紀中新世（約1000万年前）のころ、琉球列島全体が大連続きの広い陸地であったが、鮮新世（約500万年前）のころになると、宮古凹地を中心とした地殻変動によって、琉球列島は幾つかの大きな陸地に分かれた。その時に誕生した海を島尻海と呼んでいる。宮古で「クチャ（苦茶）」と言われている灰色の粘土は、そのころに堆積した宮古島の基盤岩（島尻層）です。

### 2. 島尻海岸の断層崖



この写真は、宮古島北部の島尻集落の北方にある断層崖で、宮古島の基盤岩を造っている砂層や粘土層からなる第3紀の代表的な露頭である。この地層からソウ、クジラ、サメ、貝、有孔虫、炭化物等の化石が発見発掘されることから、そのころの宮古島の位置が、陸地に近い海であったと推定されている。

### 3. 陸橋の形成



今からおよそ150万年前、島尻海にたまった砂や泥の地層は隆起し、大陸や台湾とつながり陸橋となった。

陸地になった証拠は、灰色の粘土層の上に石灰岩が重なって、この2つの異なる地層が不整合な関係になっていること、沖縄県の各地から、ソウ、シカ、ネズミ、カメそしてハブなどの化石が発見されていること等で推定されている。

### 4. 不整合

粘土層の上に石灰岩層が重なっている。これは、粘土層が海で堆積したあと、それがいったん隆起して陸地になり、再び海中に没し、その上に石灰岩層が出来たものである。

このように、いったん陸地になってはいいり浸蝕され、地層の堆積作用が中断している2つの下層と上層の関係を不整合という。



## 5. 琉球サンゴ海の形成



今からおよそ100万年前、新生代第4紀洪積世中期ごろ、これまでの陸橋は地殻変動で陥没・分離された。そして残った陸地の周辺にサンゴ礁の海ができた。この時の海を琉球サンゴ海と呼んでいる。

宮古島の北東部にも大きな陸地があり、現在の宮古諸島は完全に水没し、浅いサンゴ礁の海中にあったと推定されている。

## 6. 宮古島石灰岩



浅いサンゴ海に生息していたサンゴ礁などが壊れて堆積した琉球石灰岩のうち、宮古島に分布するものを宮古島石灰岩と呼んでいる。その特徴は、大きなサンゴ化石や石灰藻貝、ウニ、有孔虫などの化石がたくさん含まれていることである。これらは現在のサンゴ礁の海に生息しているものと同じ仲間で、かつてサンゴ礁であった海が、地殻変動で隆起したを示している。

## 7. 人類の渡来



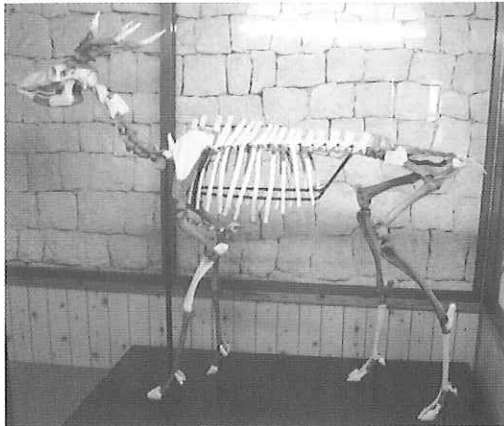
今からおよそ12万年前、新生代第4紀洪積世末期ごろ、地殻変動による厚く堆積した石灰岩の隆起と氷河時代最後のウルム氷期の最盛期がおり、サンゴ礁隆起による3度目の陸橋ができたと推定されている。

この陸橋時代に、宮古島にもヒトや動物が大陸から移動し北へ進んだと考えられている。

## 8. 動物化石

宮古島市上野地区のピンザアブからミヤコノロジカをはじめハタネズミやヒトの骨などの動物化石が発掘されている。これらの化石から、ヒトや動物が大陸から移動してきたことがはっきり解る。

### ○ミヤコノロジカ (レプリカ)



学名：*Capreolus miyako koensis*

英名：*Miyako roe deer*

発見場所：宮古島市上野字豊原・ピンザアブ洞穴

現在宮古諸島のみからしか標本産出記録報告のない世界的にも大変貴重な種である。

現生のノロジカ (*Capreolus capreolus*) は、中国東北部などユーラシア大陸北部に生息しているが、体の大きさをはじめ、角についてもミヤコノロジカに比べると極めて小さい (Takakuwa他、1999年)。このレプリカは上野字豊原のピンザ

アブら産出した標本として製作されている。これまで約37頭の標本が産出されている。

ミヤコノロジカのような大型の哺乳類が宮古諸島のような亜熱帯気候の、ある限られた地域からのみ発見されていることは動物地理学上注目し値するという。

### ○ミヤコノロジカの化石密集岩

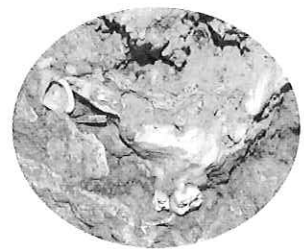
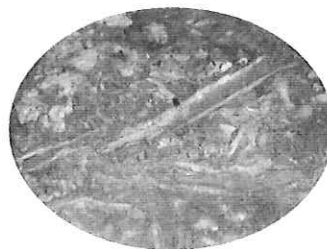
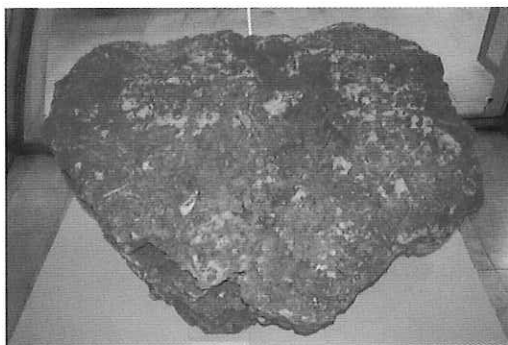
外寸：縦 1,2m 横 1,6m 高さ 40cm 重さ 約1,7 t

地層：琉球石灰岩層

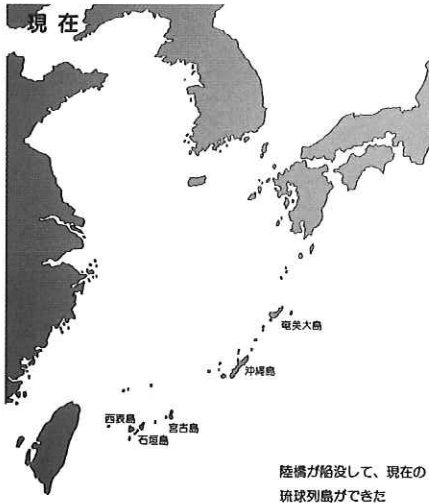
年代：琉球層群第四紀更新世後期ウルム氷期 (約2~10万年前)

発見場所：宮古島市伊良部地区長山港近くの石積擁壁

ミヤコノロジカは3万年前の洪積世(更新世)に絶滅したとされている。1973年、新種で絶滅種として記載された。宮古諸島でしか発見されておらず、世界的に見ても貴重な種である。この化石密集岩は2006年(平成18年)3月末に発見された。



## 9. 島々の形成



今からおよそ1万年前から5000年前のころである。氷河期が過ぎ、地球は暖かい時代なり、陸上の氷は溶けて海に入り、その結果海面が高くなり、低い陸地は海になった。

宮古諸島周辺も、陸地の動きと海面の上昇との影響を受けて8つの島々に分かれたのである。

与那覇湾、大浦湾、佐和田ノ浜の自然の地形といい、牛の角のように伸びた狩俣海岸の地形が、かつて池間島とつながっていたように見えるものもそのためと考えられている。

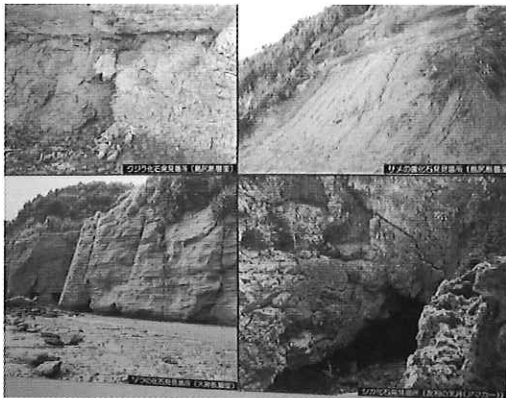
## 10. サンゴ礁の海

宮古諸島には、幻の大陸といわれる八重干瀬のようなサンゴ礁が島の周りに発達している。そこでは多くのサンゴ類、貝類、ウニ、ナマコ類などを見ることができる。これらの死骸<sup>しがい</sup>などが堆積し、宮古島石灰岩を造った。



八重干瀬（やびじ）

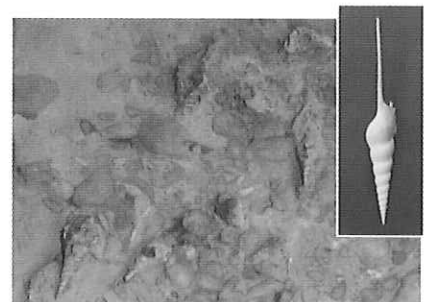
## ■化石の発見場所



化石とは大昔の生物の死骸や生活した跡がのこされたもののことである。宮古諸島でも多くの化石が発見されている。ここでは大型動物を中心に主な化石とその産地について紹介している。これらの化石から大昔に宮古諸島にもゾウやシカ、イリオモテヤマネコ等がいたことがわかる。このように化石を調べていくと、宮古諸島の成り立ちや、その当時の自然のようすを知ることができる。

### ○ハシナガソデガイの化石 学名：*Tibia fususa*

するりと美しい巻き貝です。スイショウガイ科の1種です。現在の日本列島の海にはいません。台湾南部から赤道の向こうのインドネシアにかけての熱帯海域に生きています。水深20m～50mの砂の海底にいます。水管という長い管を持っています。これが長い嘴（くちばし）のようなので「ハシナガ」と呼び成長して大人になると5個のトゲのような形の袖(そで)

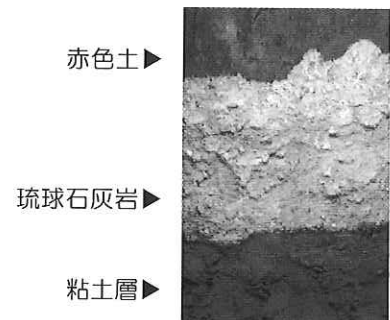


がきるので「ソデ」、あわせて「ハシナガソデガイ」という和名がついたようです。子どもの間は袖がないので大人と子どもの区別がつかず。ここ宮古島でハシナガソデガイ化石が密集して見つかったことから、約300万年前（新世代鮮新世）は熱帯の浅い海が広がっていたことがわかります。博物館の前庭に、巨大な岩盤が展示してあります。このハシナガソデガイ化石の幼貝、成貝合わせて200個以上ついています！日本一の多さであるからぜひ観察して下さい。

角田真人（神奈川県立生命の星・地球博物館外来研究員）

## ■宮古島の地層

宮古島の地層は大きく分けて3つの層になっている。  
上層部に表土(赤色土)、中層部に琉球石灰岩(第四紀層)、  
下層部に島尻粘土層(第三紀層)が積み重なっている。

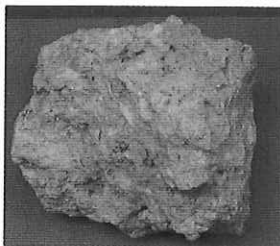


## ■宮古島の特殊な地形

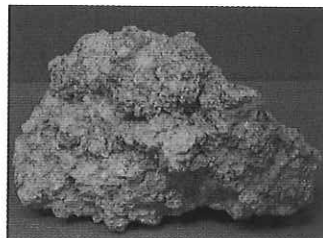
### 琉球石灰岩のいろいろ

宮古島ではいろいろな琉球石灰岩が見られる。石灰藻石灰岩、有孔虫砂質石灰岩、結晶質石灰岩、角礫サンゴ石灰岩、非結晶質石灰岩、鍾乳石などである。

琉球石灰岩の特徴は、第一は、日本では琉球列島だけに分布している。第二は、琉球石灰は砕いて道路に使用されてきたり、コンクリートの骨材として利用されてきた。



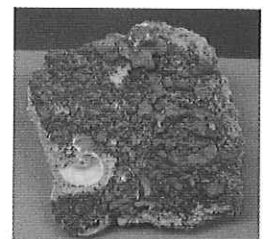
石灰藻石灰岩



有孔虫石灰岩



結晶質石灰岩



ビーチロック

## ■宮古諸島の植物

宮古諸島はタブノキ群落を中心とした照葉樹林帯に属している。しかし、他県と違って亜熱帯を特徴づけるアダン、グンバイヒルガオ、クサトベラ、ガジュマル等が島の各地で見られる。

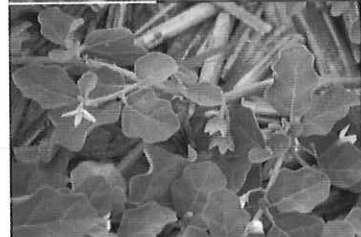
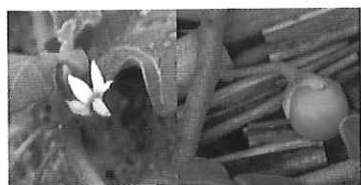
植物相は野生植物が132科450属592種6亜種16変種8品種、これに帰化植物を加えると、134科513属707種6亜種19変種8品種となっている（初島住彦・天野鉄夫・宮城康一『宮古群島の植物』沖縄県自然公園候補地学術調査報告・宮古群島 1975年）。

面積割りの種数は沖縄県の各島より少ない。固有種としてはイラブナスビ、ミヤココケリンドウが確認されている。また、カエデ類、カシ、シイノキ類、モチノキ類の自生はない。

北限種は9属24種でサキシマエノキ、オオヌカキビ、タイワンチトセカズラ、インドヒモカズラ、ミヤコジマソウ、フジボグサ類、ヒルギダマシなどが挙げられる。前述のサキシマエノキ、オオヌカキビ、タイワンチトセカズラは八重山諸島を飛び越して分布している。



南限種はなく、八重山諸島を南限とする25種のうち5種が分布している。その例としてイスノキ、マサキ、タラノキなどが挙げられる（初島住彦『琉球植物誌』追加訂正版 1975年）。



サキシマエノキ

ミヤコジマソウ

イラブナスビ



インドヒモカズラ

ミヤコジマハナワラビ



ミヤコジマツルマメ

アサガオガラクサ

ミヤコグサ

リュウキュウツチトリモチ

（写真提供：佐藤宣子）

## ■宮古諸島の鳥類

これまで宮古諸島で記録（2009年現在）されている鳥類は57科330種である。その中で、アカショウビンやサンコウチョウのように春に渡来し卵を産み、ヒナを育て、秋に帰っていく夏鳥は4科8種で全体の2%である。スズメやメジロのように1年中見られる留鳥は17科28種で8%、シロハラやカモ類のように北国の寒い冬を避けて宮古諸島で冬を越す冬鳥は14科58種で18%を占める。残りの152種46%は、宮古諸島を中継地として南の島々に渡るシギ、チドリ類のような旅鳥（26科85種）や台風等の気象条件によって迷い込んだりするコウノトリのような迷鳥（45科152種）等である。

宮古諸島は小さな島であるが、国指定天然記念物10種、絶滅種1種、絶滅危惧種3種、危急種12種、希少種31種が記録されている。このことは、宮古諸島が渡り鳥にとって如何に重要な場所であるかということを実に証明している。



サシバ



キンバト



カラスバト

## 大野山林

大野山林は宮古島唯一のグリーンベルトで、リュウキュウマツ、アカギ、タブノキ、ヤブニッケイ等が高木層、亜高木層を形成している。ここではオオアマクサシダ、ミヤコジマハナワラビ、アイノコホウビカンジュ、ミソナオシ、ノボタン等の希少植物がみられ、これまでに約170種類の植物が記録されている。リュウキュウマツは、そのほとんどが戦後植林されたものである。

大野山林は銃猟禁止区域に指定され、国定天然記念物のキンバトやカラスバトをはじめ、オオクイナ、リュウキュウコノハズク、ズアカアオバト、アカショウビン、サンコウチョウ、ヒヨドリ、メジロ等、山野の鳥のほとんどを見ることができる。

これまで約130種類の記録がある。その他、アカハラダカやサシバの渡り、越冬サシバ（落ちダカ）も見られる。また、カラフルな昆虫類が多く見られ、両生類やはハ虫類も見ることができる



アカショウビン

## 池間湿原の鳥類



2007年撮影

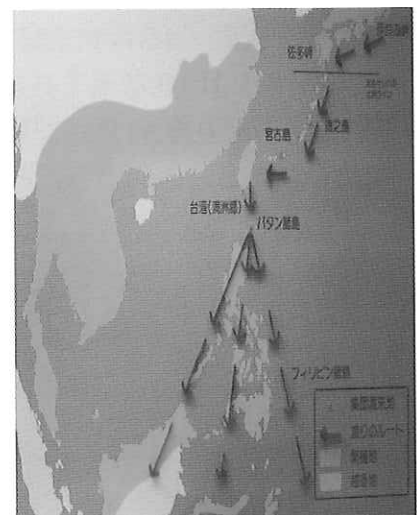
池間湿原は池間島のほぼ中央部にある約25haもの広大な湿原である。亜熱帯特有のフトイ、ヒメガマ、イヌクログワイ、タデの仲間サワズメノヒエ等の大群落があり、その中でムラサキサギ、リュウキュウヨシゴイ、カイツブリ、カルガモ、バン、ヒクイナ等が繁殖している。水あり隠れがありで、生活がしやすいものと思われる。冬季にはアオサギ、コサギ、クロサギ、ヨシゴイ、オオヨシゴイ、シマアジ、ヒドリガモ、マガモ、コガモ、ハシビロガモ、キンクロハジロ、スズガモ、オオバン、サンカノゴイ等が見られる。宮古諸島唯一の大変貴重な水鳥たちの楽園である。

## サシバ (*Butastur indicus*) の渡り

分類学上は、脊椎動物門、鳥綱、タカ目、タカ科、サシバ属に属す。秋田県以南に夏鳥として渡来し、低い山や丘陵地帯の森林で繁殖する。宮古諸島に大群として立ち寄るのは、秋の渡りの時である。

繁殖は年に1回で5～6月である。卵は2～4個産む。抱卵日数は28～30日で、ヒナはふ化後34～36日で巣立つ。主な食べ物は、ネズミ、ヘビ、トカゲ、カエル、スズメ、昆虫等である。

サシバの幼鳥は目の色が黒みがかった青色(宮古方言名・オオミー：omi-) ないし、にごったような青褐色



(タリカスミー：tarikasumi-) をしているが、成長するにつれて赤みがかった黄色（アカミー： akami-) や黄色（キンミー： kinmi-) に変化する。また胸の縦じまも横じまに変化する。なお、サシバの渡りのコースについてはまだ不明な点が多いが、大体、次の各地点を中継地としながら最終越冬地の東南アジアまで渡るものと推定されている。

愛知県伊良湖岬—鹿児島県佐多岬—徳之島—宮古諸島—台湾—バタン諸島—フィリピン各島、インドネシア各島に散らばって越冬する。

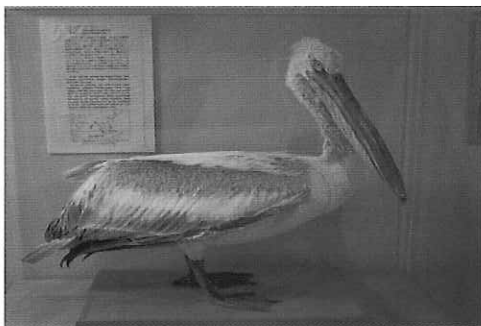
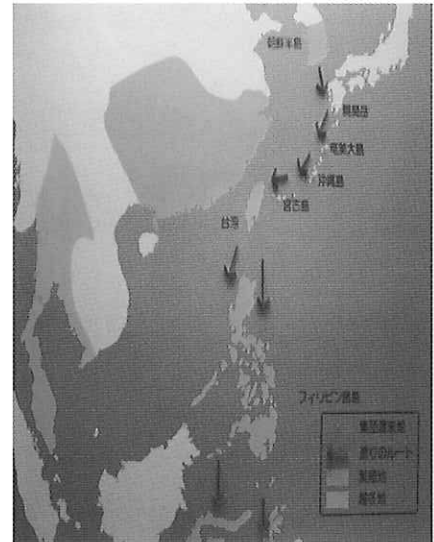
### アカハラダカ (*Accipiter soloensis*) の渡り

アカハラダカは日本では繁殖せず、朝鮮半島や中国東北部で繁殖し、秋にはマレー諸島、フィリピン諸島、ニューギニア等に渡るといわれている。日本ではこれまで記録が少なく迷鳥としてあつかわれてきた。

ところが、1980年9月に宮古島の大野山林で少数のアカハラダカの渡りが記録され、その後の調査で、9月10日前後約2週間、サシバと同じ規模の渡りをするということが解ってきた。

アカハラダカは白露の頃に渡って来ると言うことで、「白露のタカ渡り」とも呼ばれている。

現在、アカハラダカは繁殖地の朝鮮半島から九州の西海岸を通り奄美大島、沖縄島、宮古島、石垣島で休息しながら東南アジアに渡るものと推定されている。



ハイロペリカン (学名：*Pelecanus philippensis*  
英名：*Spotbilled pelican*)

ペリカン科は世界で7種類、日本で2種類記録されている。世界の温熱帯に分布する。体が大きく、嘴（くちばし）も長い。下嘴には袋がある。翼は長くて幅が広い、尾は短く海岸や湖沼に住む。飛ぶときは翼をゆっくりと羽ばたき、首をS字型に曲げる。集団をつくり泳いで魚を追い立て、一斉に潜ってとり、空中から急降下して採ったりする。1日に約1,000gの餌(えさ)を採るといふ。日本では迷鳥である。この剥製は2000年1月12日に伊良部島で保護され、沖縄子供供の国に送られたが残念ながら衰弱死したものである。

## ■宮古諸島の昆虫

「東洋のガラパゴス」と呼ばれる沖縄には約6,500種を越える様々な昆虫類が生息している。しかし、沖縄諸島や八重山諸島に比べ小さな島が多い宮古諸島では、山や川、池などの自然環境が乏しいため、森林性の昆虫や水生昆虫などが少ない傾向がある。しかし、一方で宮古諸島のユニークな自然環境は、ミヤコニニ、ミヤコマドボタル、ミヤコキボシカミキリなどの、この地域でしか見られない貴重な昆虫類を進化させてきた。現在、宮古諸島からは、26種類の

固有種と15種類の固有亜種の昆虫類が知られている。

宮古で見られる主な昆虫は次の通りである。

オキナワチョウトンボ▶



トンボの仲間	ハラボソトンボなど約28種
ゴキブリの仲間	ミヤコモリゴキブリ（固有種）など16種
カマキリの仲間	ハラビロカマキリなど4種
バッタの仲間	オキナワキリギリス・カマドコオロギ・オンブバッタなど約55種
ナナフシの仲間	ミヤコエダナナフシ（固有種）など4種
セミの仲間	ミヤコニイニイ（固有種）・ツマグロゼミなど4種
チョウの仲間	ジャコウアゲハ（固有亜種）スジグロカバマダラなど約72種
ガの仲間	ウスホシミミヨトウ（固有種）・キオビエダシャクなど約180種
コガネムシの仲間	ミヤコドウガネ（固有種）・ミヤコチャイロカナブンなど約27種
カミキリムシの仲間	ミヤコルリボシカミキリ（固有種）など約33種
ホタルの仲間	ミヤコマドボタル（固有種）・キイロスジボタルの2種
ハチの仲間	タイワンアシナガバチなど148種（うちアリ科：49種）
アリの仲間	ミヤコオオアリ・コヌカアリなど約49種

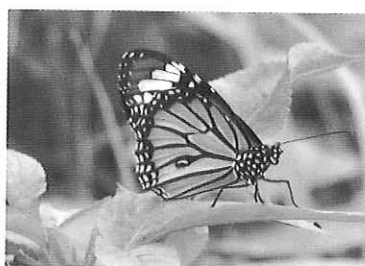
（東清二監修「増補改訂 琉球列島産昆虫目録」2002年参照）

### 宮古島の蝶

宮古諸島は、南北へ細長く連なる沖縄県の島々のほぼ中心に位置するため、沖縄諸島で見られるチョウと八重山諸島で見られるチョウの両方の種類を観察することができる。しかし、大きな山や森が少ないために、コノハチョウやジャノメチョウなどの森林を好むチョウが少なく、他の地域に比べてもチョウの種数はやや少ない。1999～2006年の調査によると、宮古諸島で確認されたチョウは52種で、そのうち定着種は45種、7種は偶産種であった（砂川博秋「宮古島市博物館紀要・第11号」）。チョウの仲間では、ジャコウアゲハ *Atrophaneura alcinous miya koensis* (Omoto) は唯一の宮古諸島の固有亜種である。他の地域に比べ、雌の羽が白っぽい。



◀オオゴマダラ



▲スジグロカバマダラ



◀ツマベニチョウ



▲ジャコウアゲハ（♂）



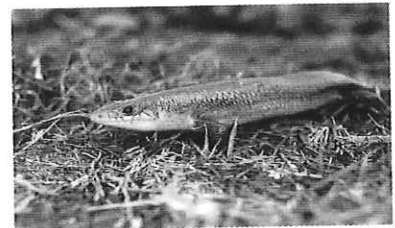
▲ジャコウアゲハ（♀）

### ■宮古諸島の哺乳類・は虫類・両生類

宮古諸島に生息する哺乳類は、リュウキュウジャコウネズミ、ナンヨウハツカネズミ、クマ

ネズミ、ミヤココキクガシラコウモリ、ニホンイタチの他、ドブネズミ、アブラコウモリ、ヤエヤマオオコウモリが記録されている。そのうちニホンイタチはネズミ退治のため1960年代後半に移入されたものである。爬虫類では、トカゲの仲間ではキシノウエトカゲ、キノボリトカゲ、ミヤコトカゲ、サキシマスベトカゲ、ミヤコカナヘビ、ヤモリの仲間ではミナミヤモリ、ホオグロヤモリ、タシロヤモリ、オンナダケヤモリ、オガサウラヤモリ、キノボリヤモリ（外来種）、ヘビの仲間ではサキシマスジオ、サキシママダラ、サキシマヒバア、ヒメヘビ、ミヤコヒバアが記録されている（サキシマアオヘビの記録は誤りとされ除外された）。

キシノウエトカゲは、我が国最大のトカゲで宮古諸島を分布の北限とし、国の天然記念物にも指定されている。ミヤコトカゲは岩礁性の海岸で見られ国内では宮古諸島にだけ分布している。ヒメヘビは大変貴重な種で、確実な生息地は宮古島と伊良部島だけである。



キシノウエトカゲ

両生類では、ミヤコヒキガエル、ヌマガエル、ヒメアマガエルの他に、外来種シロアゴガエルの定着が記録されている。ミヤコヒキガエルは宮古島だけに分布し、大東諸島は移入である。産卵は9月から始まり冬場まで続く。産卵時期には雌を奪い合う蛙合戦を繰り返す。

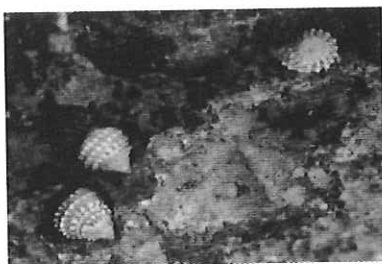


サキシマスジオ

## ■潮間帯(磯)の小動物

潮間帯とは干潮線と満潮線の間で広がる場所である。潮の干満によって陸地と海の状態を1日に2回交互に繰り返す。そこでは激しい環境にも拘わらず、多様な生物が数多く生息しており、生物の分布状特異性が見られる。

潮間帯に生息する動物の種類や数は、底質が岩礁であるか砂や泥質であるかなどによって異なる。岩礁にはイモガイ、タマキビ類、アマオブネ、コンペイトウガイなどの種々な貝類の他、エビ・カニ類、ウニ・ヒトデ類などが生息している。砂浜にはイソガニ、イソハマグリ、ゴカイなど、泥質・砂泥質の潮間帯には二枚貝の他、シオマネキ、ミナミコメツキガニなどの小動物が生息している。



コンペイトウガイ



シオマネキ

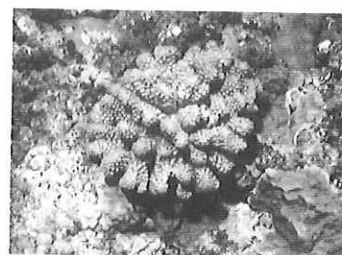
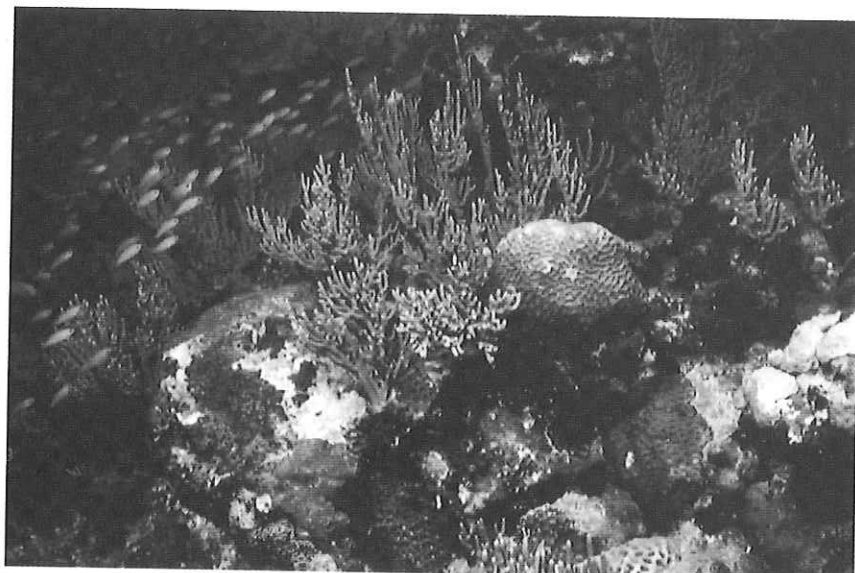
潮間帯では、潮の干満という激しい環境の変化に対する生物の適応性がそれぞれの種によって様々に異なるため、高潮位から低潮位にかけて生物の带状分布が形成されている。

## サンゴ礁の動物たち

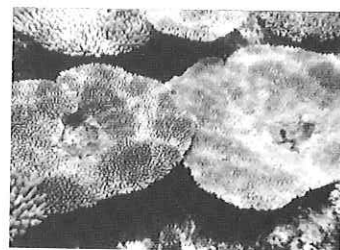
沖縄の海を代表する生物はサンゴの仲間である。その中でも造礁サンゴはサンゴ礁を造る事でよく知られている。造礁サンゴの形や色はさまざまである。波の静かなサンゴ礁内と波の強いサンゴ礁の外縁部では、それぞれ異なった種類、形のサンゴが生活する。

島の周りにサンゴ礁ができると、サンゴを食べる魚やサンゴにかくれる小さなエビやカニなど、いろいろな動物たちが集まってくる。

沖縄の海の色鮮やかな生物たちの世界はこうしてつくられるのである。



▲イボハダハナヤサイサンゴ



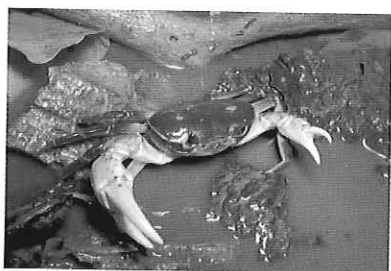
▲クシハダミドリイシ

## ■宮古島の湧水に生息するエビ・カニ類

宮古島の大部分は透水性の琉球石灰岩におおわれているため地下水系が発達し、島の随所に湧水・井戸・洞穴地下水が見られる。湧水とは地下水が自然の状態湧き出している「場所」あるいは「水」のことをいい、宮古島の湧水は、湧水点が陸上にある「地表水」と洞穴などの地下にある「地下水」に大別できる。

地下水域からは、これまでに甲殻類（エビ・カニなどの仲間）、ヒルミミズ類（ミミズの仲間）、貝類、魚類などが見つかっている。

地表水環境の湧水には貝類（トウガタカワニナなど）、甲殻類（コンジンテナガエビやタイワンベンケイガニなど）、水棲昆虫類、両生類、魚類、藻類（シマチスジノリ）などの様々な生物が生息している。ほとんどの種が琉球列島の河川に広く分布する種であるが、宮古にしかない種（固有種・固有亜種）の存在も明らかになった。現在、宮古島の湧水には、7科14属25種のエビ、カニなどの十脚甲殻類（甲殻類のうち、特に大型で5対の肢を持つグループを十脚類とよぶ）が生息していることが報告されている。



ミヤコサワガニ



ミナミテナガエビ



オニヌマエビ

島の大部分がサンゴ礁からできる琉球石灰岩に覆われていることから、宮古島は海に沈んでいたと考えられていた。ところが、生活史（生まれてから死ぬまでの一生）やその繁殖様式（子孫の増やし方）の特徴から海を渡って他の島に行くことができないミヤコヒキガエル生態やミヤコサワガニの生息が明らかになったことで、宮古島でも沈まなかった場所があったのではという新たな考えもでてきている。（藤田喜久「宮古の湧水に生息する十脚甲殻類」2007年他）

## ■四季の星座

### 春の星座（4月）

北の空を見上げるとひしゃくを横に倒したような7個の星が並んでいる。これが北斗七星（オオグマ座）である。その柄の先の方から東へ伸ばしていくと、オレンジ色の明るい1等星につきあたる。これはウシカイ座のアークトゥルスで、さらに伸ばすと南東の空に真っ白に輝く1等星が見られる。オトメ座のスピカで、北斗七星の柄からスピカまでを結んだ曲線を「春の大曲線」という。

大曲線をさらに伸ばすと4角形をしたカラス座、ウミヘビ座の尾へと続く。アークトゥルスとスピカを結び正3角形を作るように、西の方にシシ座のデネボラがあり、この3角形は「春の大3角形」と呼ばれる。

南天には空高く「？」を裏返しにした形の1番下に白く輝く1等星シシ座のレグルスがあり、その西にぼんやりと雲のように見えるのがカニ座で、その下の方に、かすかな星が輪を作っているがウミヘビ座の頭である。

北斗七星の柄の南にはリュウケン座、その下のシシ座のデネボラの間あたりに、3角形の暗い星が集まっているのがカミノケ座である。

その他、北天にはカンムリ座、リュウ座、ギョシャ座、ペルシウス座、カシオペア座など、南天にはオオイヌ座、コイヌ座、ホ座、トモ座、コップ座、テンビン座などが見られる。

### 夏の星座(7月)

北東から南東へ伸びる天の川にそっていくと、南の空に赤い大きな星アンタレスを中心に「S」の形をしたサソリ座がある。その東にイテ座、北に5角形をしたヘビツカイ座、その上の天頂近くには「H」の字のように並んだ星が見える。これがヘルクレス座です。その西方に「C」の字を倒したように星が並んだカンムリ座がある。

イテ座の上には、七夕で有名なワシ座の牽牛星（アルタイル）が見え、アルタイルに対して、天の川の西側の岸には白い織女星が輝いている。これがコト座のベガである。

アルタイルとベガを結んだ北の方には大きな十文字を描くように星が並んでいる。これがハクチョウ座で、そのアルファ星デネブとアルタイル、ベガの3つの明るい星は大きな2等辺3角形を作っています。これを「夏の第3角形」といいます。

北の空には、小さなひしゃくを逆さにした形のコグマ座が、その上にはリュウ座、そして西の方へオオグマ座、リュウケン座、東方にはケフェウス座、カシオペア座など、南天にはテンビン座、オトメ座、カラス座、イルカ座、オオカミ座、ケンタウルス座、ヤギ座、ヘビ座などを見ることができる。

## 秋の星座（10月）

夏の第三角形が西の空に傾き、東天に秋の代表的な「ペガサスの4角形」が現れる。銀色の翼をもったペガサスの胴体を作っているこの4角形は、秋の星座の中心をなしている。この4角形の南に、4個のかすかな星が小さな「Y」の字の形に並んでミズガメ座を作っている。その下に、秋空でただひとつの1等星であるミナミノウオ座のフォーマルハイトが見える。これより東には、クジラ座の尾に当たるデネブカイトスという2等星があり、その上に春分点のあるウオ座が見える。

ペガサスの4角形をひしゃくのますとすると、北斗七星を一回り大きくしたような柄に当たるのがアンドロメダ座で、その柄を少し伸ばした先にペルセウス座がある。また、アンドロメダ座の東には、サンカク座、オヒツジ座がある。

北の空には、北極星の上方に5角形を逆さにした形のケフェウス座、その東に「W」字の形に並ぶ5つの明るい星カシオペア座、さらにペルセウス座と続き、黄道にそって西方からイテ座、ヤギ座、ミズガメ座、ウオ座、オヒツジ座がある。

その他、北天にはコグマ座、リュウ座、コト座、ヘルクレス座、ウシカイ座、カンムリ座、南天にはホウオウ座、イルカ座、ツル座、インディアン座などがある。

## 冬の星座（1月）

夏の星座の代表であったサソリ座が西の空へ隠れると、変わって冬の星座で名高いオリオン座が現れる。「3つ星」を帯にそれを囲むようにして、1等星の赤色をしたベテルギウスや青白いリゲルなど、4つの星が長方形に取り巻いている。

南天の天頂付近を見ると、6つばかりの星がより集まって光っている。これが有名なプレアデス星団（スバル）である。その南東に「V」の字に並ぶヒヤデス星団がオウシ座の中心で、そのそばにこの星団のアルファ星である赤い1等星アルデバランが見える。

オウシ座の下方には、川の流れを表すようにエリダヌス座がうねうねと曲がりながら南西の地平線に消えていく。南東の空には恒星の中で一番明るいオオイヌ座のアルファ星シリウスが白く輝いています。天頂付近のペルセウス座の東に5角形をしたのがギョシャ座でアルファ星のカペラが輝いている。

オリオン座の上方東の空には、仲の良い双子の兄弟フタゴ座の1等星ポルックスと2等星カストルがあり、その南に輝く白い1等星はコイヌ座のアルファ星プロキオンで、このプロキオンとオリオン座のベテルギウス、オオイヌ座のシリウスを結んだ正三角形を「冬の大三角形」と呼んでいる。

その他、南天には、青白いしみのような、かすかな光を出すプレセペ星団を中心にしたカニ座、ウサギ座、ハト座、ウオ座、クジラ座など、北天にはシシ座、オオグマ座、カシオペア座、ケフェウス座、アンドロメダ、ペガサク座、コグマ座、リュウ座など数多く見ることができる。



## 【美術工芸部門】

他地域とは異なる歴史と風土のなかで育まれた宮古の文化は、特色ある宮古上布という美術工芸品を生みだした。原料となる植物の苧麻で糸を績むところから始まり、すべてを手作業で作る宮古上布の技法は、越後上布・小千谷縮と並んで、国の重要無形文化財の指定を受けている。

美術工芸部門では、その宮古上布や、市指定文化財となっている「旧家所蔵品」を中心に、宮古の人々が創作し、使用し、鑑賞してきた美術工芸品を紹介する。

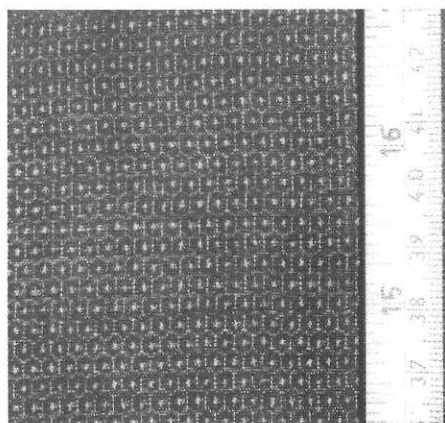
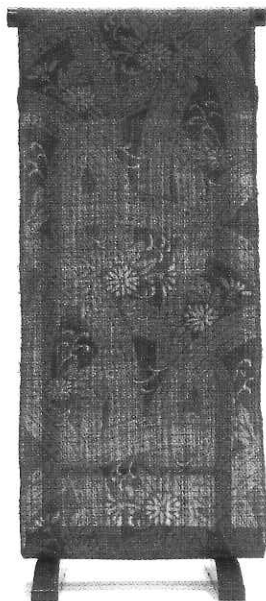
### ■ 宮古上布

宮古上布は経糸、緯糸ともに手績みの苧麻糸のみで織られる麻織物であり、夏用着尺として最高のものとされている。

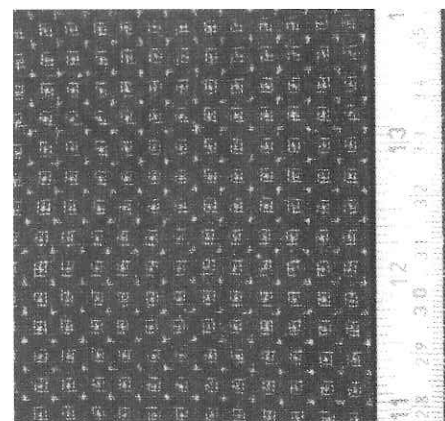
15世紀の漂流朝鮮人の帰国記録である『李朝実録』には、当時宮古島にて〈真苧〉が織られていたとあり、宮古島には古い時代から麻布が存在していたことがわかっている。その宮古島の織物が宮古上布として広く世に知られるようになったのは、1582（万暦13）年、下地間切の洲鎌与人上地真栄の妻、稲石が首里王府に19疋の「綾精布」を献上したことがきっかけだと伝えられている。

その後、薩摩の琉球支配とともに貢納布としての時代を経て、明治36年の人頭税廃止とともに自主生産の時代を迎えると、宮古上布は島の産業として重要な位置を占めるようになる。当時の地域ごとに、染色や製糸、織柄などが特徴づけられ、また本土商人たちからの様々な絵柄の注文や「絵図（イーズ）」式拵手法、「拵締機」の導入によって、図柄が貢納布の時代とはまた違う複雑さと精緻さを獲得するのも、この頃である。

原料の苧麻で糸を作るところから始まり、布として仕上がるまでの全行程を手作業で分業して行う宮古上布は、1978（昭和53）年には国の重要無形文化財に指定され、さらに2004（平成16）年には『宮古苧麻糸績み技術保存会』が設立され、現在に至っている。



▲ 宮古上布の伝統的な柄のひとつ  
カミヌクー



▲ 宮古上布の伝統的な柄のひとつ  
フズリ・ジュームズ



◀ 苧麻紺地経緯拵平織着尺 大柄 16ヨミ  
図案・拵括り/下地恵康 作

## 宮古上布ができるまで

### 1 〈苧麻の刈り取り〉

苧麻はイラクサ科の多年生植物で、別名「からむし」「まを」と呼ばれる。沖縄本島では「マーウー」、宮古では「ブー」といい、株から芽が出たのち、35日～40日目には1.5m前後に生長し、繊維をとることができる。初夏に取れるものがウリズンブーと呼ばれ、最も良質とされる。

刈りとった苧麻は茎から表皮をはぎ取り、ミミガイ(トコブシ)の貝殻をあてて裏側からしごき、繊維以外の部分を削ぎ落とす。



### 2 〈苧麻系績み〉

よく乾燥させた繊維を、指や爪を使い繊維の根の方から細く裂いていく。経糸用は髪の毛ほどに、緯糸用はそれより太めに裂き、適量がたまると、繊維を結ばずに一本につなぐ。経糸は二本どり(双糸)、緯糸は一本どり(単糸)にし、指で撚りつないでいく。



### 3 〈撚りかけ〉

糸車を使い、績んだ糸に撚りをかける。撚りをかけると、毛羽立ちがおさえられ丈夫になる。撚りが甘いと糸が弱く織りにくくなる。経糸は二本撚り、緯糸は一本撚りで、撚りかけをしながら、糸車のツミ(針状のもの)に差してある小管に糸を巻いていく。



### 5 〈整経〉

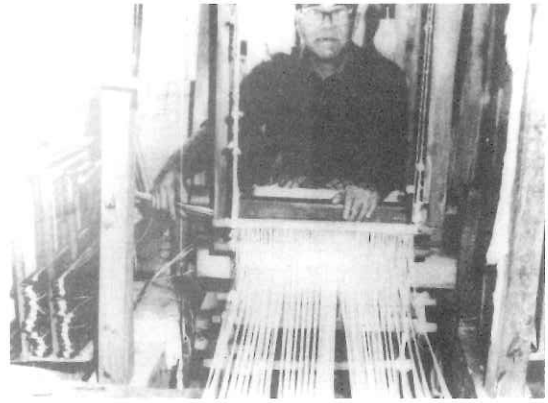
手経木(カシギー)という器具をつかって、撚りかけした糸の長さをととのえる。手経木はその1巻が長さ1.5mで、5回かけたものを1本(約7.5m)、80本合わせて1疋と数え、販売する際には10～20疋をひとまとまりとする。1反には経緯あわせておよそ50疋の糸が必要で、宮古上布一反を織るためには約30,000mの糸を必要とする。一反分の糸を一人で績むには3ヶ月以上かかる。



## 6 〈<sup>ひざりくく</sup> 緋括り (機<sup>はたし</sup>締め)〉

緋括りの方法は、手でひとつひとつ括る手括りの方法と締機を使う機締めの方法がある。

締機は明治末期に奄美大島からその技術が導入されたもので、1反の着尺に使われる緋糸を緋の柄にあわせて適当な太さにまとめ、あらかじめデザインされた絵図（図案）にそって機で織り締めていく。



## 7 〈染色〉

糸を染料液に浸し、時々しばっては外気にあて、再び染める。糸が十分に染まるまで一週間ほどかけて、これをくり返す。琉球藍で染める紺<sup>こんじょうろ</sup>上布の場合は、黒に近い濃紺なるまで染める。ほかの植物染料で染める宮古上布の場合、媒染を使って様々な色に糸を染めていく。

## 8 〈<sup>せいしよく</sup> 製織〉

宮古上布を織りあげるには、かつて生産高が最盛期だったころの熟練した織り子でも、1日30cm、一反を仕上げるのに1ヶ月から2ヶ月はかかるとされていた。ある程度織りあげると、糸を針先で引きながらずれた緋の調整を行い、緋合わせが終わってからまた織り出す。

宮古上布の一反は、各規格によっても前後するが、幅37cm、長さ12m30~60cm、12~14舛以上である。宮古上布の緻密さを知る手がかりのひとつに、この舛がある。舛（算）とは製織に使用する櫛状の道具である「箄<sup>おさ</sup>」の密度を表す用語で、箄目40羽<sup>は</sup>を1舛とする。箄の羽（隙間）のひとつには通常、経糸を2本通すので、10舛の織物の場合、布幅37cmのなかに、 $10（舛） \times 40（羽） \times 2（糸の本数） = 800$ 本の経糸が使用されていることになる。



## 9 〈<sup>きぬたう</sup> 砧打ち〉

できあがった反物は沸騰した湯のなかで、汚れがとれるまで煮込み洗いをし、その後、糊づけをして布幅や形をととのえ、台木の上に置いて木槌でまんべんなく叩いていく。叩くことによって細かな毛羽が取れて布地が均質になり、上布になめらかな艶<sup>つや</sup>が生まれる。

こうして完成した反物は、規格検査を受け、宮古上布として市場に出される。



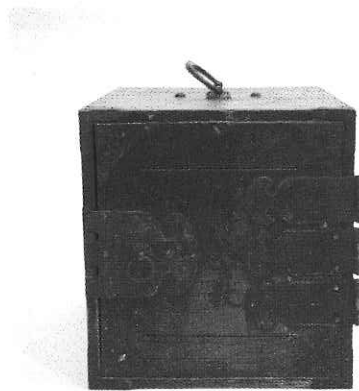
## ■ 旧家所蔵品

### 忠導氏仲宗根家

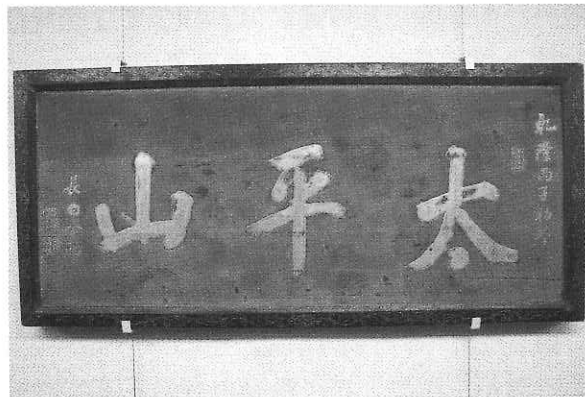
忠導氏仲宗根家は16世紀初頭、宮古の支配者として君臨した仲宗根豊見親の直系で、名前の頭に氏共通の漢字（名乗り頭）として「玄」の字がつく。旧藩時代には白川氏と宮古を二分するほどに勢力のあった旧家である。

仲宗根豊見親は、佐多大人を首長とする与那覇原との戦に勝って宮古を統一した目黒盛豊見親の5世にあたり、白川氏2世大立（里）大殿のあと宮古首長になった人物だと伝えられている。1500年、八重山のオヤケアカハチを平定の中山軍の先導を務めたなどの功績により、宮古の頭職に任命されている。この忠導氏一門からは、多くの頭職をはじめ首里大屋子・与人・目差など、宮古の要職を務める人物が数多く出ている。

同家が所蔵している資料類は、代々当主が引き継いできたものであり、その多くは18世紀中頃のものであるが、なかには「金頭銀莖簪」（第一展示室に展示）など16世紀にさかのぼるものもある。



▲ 帳箱



▲ 扁額「太平山」

### 向裔氏本村家

向裔氏は首里の向姓の流れを汲み、名乗り頭に「朝」の字がつく。宮古では多良間向裔氏（屋号「多良間」）と平良向裔氏（屋号「前比屋」）の二系統がある。

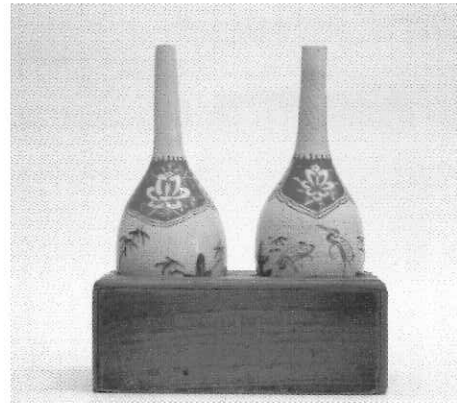
向裔氏本村家は前比屋系統で、屋号を「ウプンターラ」といい、1729年に平良の頭をつとめた朝忠の孫・朝副を祖とする。朝副は伊良部首里大屋子をつとめた人物で、このウプンターラ系統からは朝副の孫・朝祥が1851年に下地の頭を、朝祥の曾孫・朝亮が大正8（1919）年に平良の村長をつとめている。

同家が所蔵している資料は、この朝祥、朝亮に関わるものがほとんどであり、19世紀以降のものである。

※ 首里大屋子・与人……琉球王府によって任命され、間切・島嶼ごとに置かれた役職の名称



▲ 祭祀用具一式

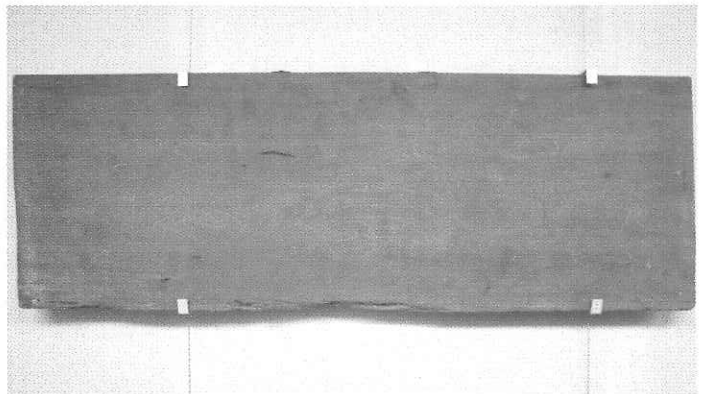


▲ 酒器対瓶

### 英俊氏伊志嶺家

英氏は沖縄本島で英祖王統を築いた英祖王の末裔と言われ、宮古の英俊氏は英氏4世重祐の次男・恒充を祖とし、名乗り頭に「恒」の字がつく。

恒充は洲鎌与人をつとめた人物で、この系統からは1767年に恒道が平良の頭となっている。1747年、中山からの帰途、暴風にあって台湾に漂着、順風を待っている時、帆柱の折れた清国の船が恒道の船の近くに



▲ 扁額「福祿寿」

漂着し救助を求めたため、恒道は少ない水や食料を分け与えて総員24名を救助した。このことを知った清国皇帝は、布、綿花、茶、酒などの品を贈って恒道の義拳を讃え、さらに尚敬王に書を送って「守礼の国の名に恥じない仁心大義」と讃えたと伝えられている。

英俊氏伊志嶺家所蔵品には、1719年6月に冊封副使として来琉した除保光の書いた「福祿寿」の扁額がある。

### 根馬氏宮国家

根間氏宮国家は、14世紀中頃に与那覇原の軍勢を破って宮古を統一した目黒盛豊見親の子・真角与那盤殿の次男・根間の伊嘉利を祖とする系統で、「定」の字を名乗り頭とする。

根間の伊嘉利は、「祖先の霊が安らかに昇天し、島中が豊作し子孫繁盛する」という「コネリ祭」を始めた人物である。この系統は屋号を「東原家」と称し、頭職以下宮古の要職を勤める人物を出している。

同家所蔵の史・資料には、目黒盛豊見親の使用したと伝えられる刀剣類などがある。



▲ 帳箱



▲ 角皿（ツヌザラ）

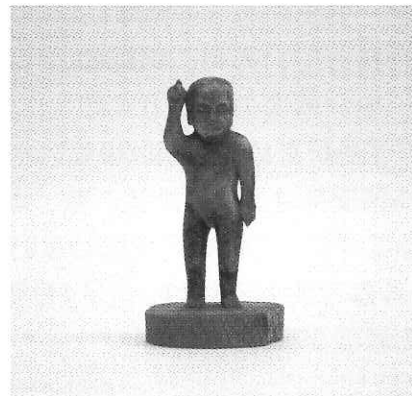
### 祥雲寺

正式には龍宝山祥雲寺と称し、臨濟宗妙心寺派の寺院である。慶長16（1611）年に薩摩から検察使が来島して検地を行い、宗教上の統合と宗旨を定めるために琉球王に請うて寺院と権現堂が建立され、首里円覚寺の山月和尚を第一祖師として開山した。

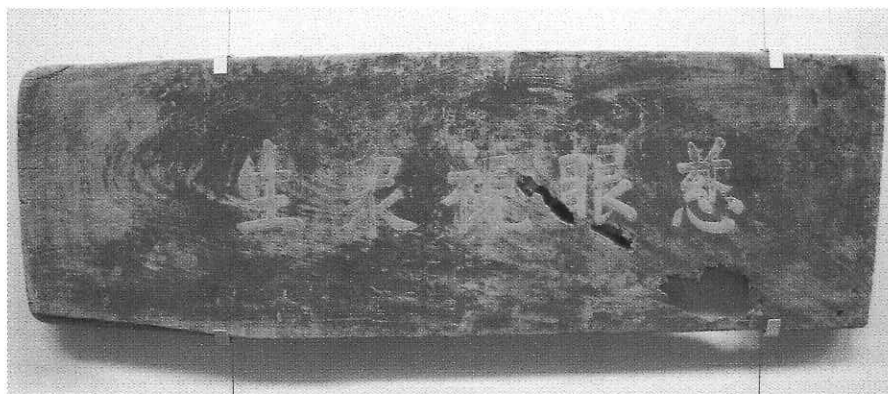
寺院が所蔵されている資料のなかには、雍正7（1729）年祥雲寺住持・覚瑞長老から寄進された達磨尊者木座像や、旧藩王尚泰の四男・尚順男爵が観音堂に掲げるために揮毫した扁額「慈眼視衆生」などがある。



▲ 菩提達磨尊像



▲ 誕生仏

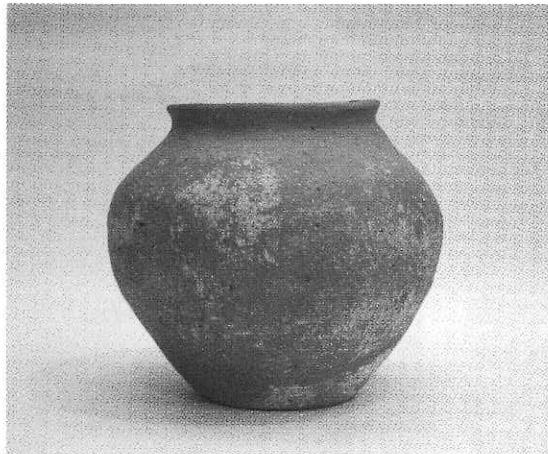


▲ 扁額「慈眼視衆生」

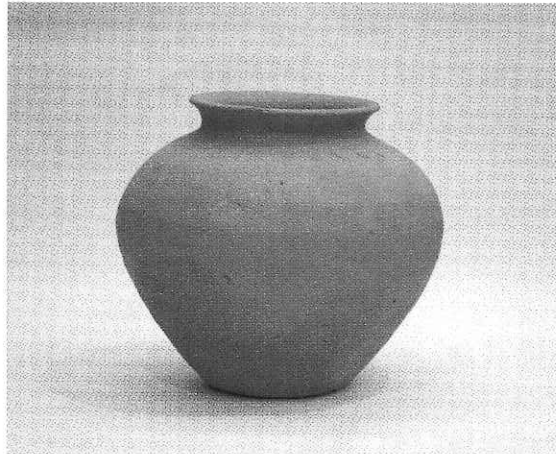
## ■ 宮古の焼き物

沖縄本島において1350年頃、察度王の時、恩納村の山田城下で土器に似た陶器が（山田焼）が焼かれ、この山田焼が沖縄で最初の陶器であろうと言われている。その後、海上交易の発展により中国から陶磁器や褐釉陶器が伝わり、喜納焼や知花焼などが作られるようになる。17世紀初頭には、古我地、喜名、知花、宝口、湧田など各地に窯があった。1682年、尚貞王が沖縄各地にあった窯（美里村知花窯、首里宝口窯、那覇湧田窯）を現在の壺屋地区に集め、以降「壺屋焼」として現在まで続いている。

離島では沖縄本島とは違う焼物文化が島ごとに根付いている。島全体が平坦で山や川がなく、木材を貴重なものとしてきた宮古島では、大量の薪材を必要とする褐釉陶器はその発展を制限されてきた。住屋遺跡や砂川元島遺跡などからは、交易により流入した陶磁器、褐釉陶器などとともに、宮古式土器と呼ばれる土器の破片が出土している。宮古式土器は窯を使わず露天で焼かれた素焼きの焼き物である。回転板を使用した土器は、壺屋焼などの沖縄製陶器の影響を受けながら18世紀ごろまで盛んに焼かれ使用されていたといわれている。



▲宮古式土器（輪づみ、叩き手法）

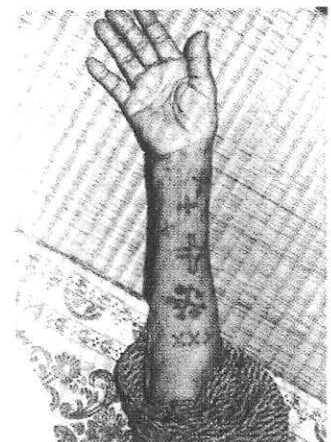
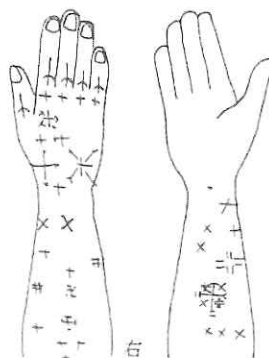


▲宮古式土器（回転板使用）

## ■ ハジチ 針突

針突とは明治期まで沖縄に存在した女子の手に文身をする習俗である。宮古ではピーツキ°、ピツツギ、パイツチ、パリツク、パイツキ、奄美・沖縄本島ではハジチ、ハツキ、ファジチ、パジチなどという。宮古ではおもに7～14歳の少女期に行われ、その多くは家人や友人同士、または自分で施した。バサン（鋏）、カシギ（経木）、タカブン（高膳）など生活に密着した文様が主であり、沖縄本島や他の群島に比べて多くの種類があった。

明治32（1899）年に禁止令が発布され消滅の一途をたどり、針突所持者の高齢化にともなって、現在ではもう見かけることはない。



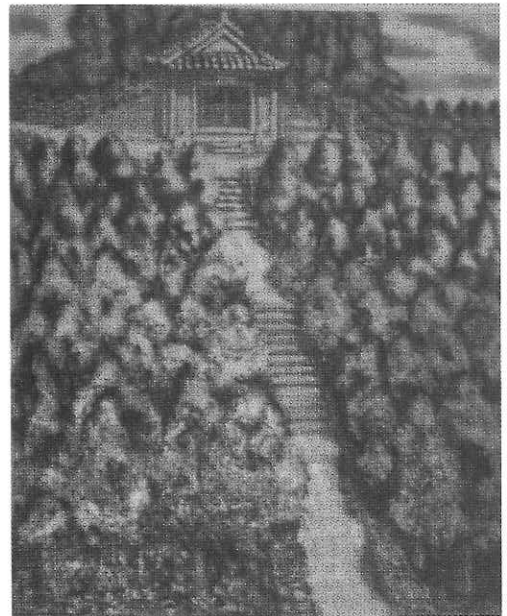
宮古の針突は甲からひじにかけて長く彫られている

「針突の譜」 宮古島の針突の文様をモチーフに描かれた乾性フラスコ画作品の複写である。寄贈者の市川重治は美術文化協会の常任委員である。大阪樟蔭女子大学助教授在職中に、沖縄・奄美地方の針突の風習について調査・研究を行った。『宮古・八重山の成女儀礼』（昭和58年、沖縄県教育委員会）の執筆者のひとりであり、『南島針突紀行 沖縄婦人の入墨を見る』（1983年、那覇出版）などの著書や論文を著した。

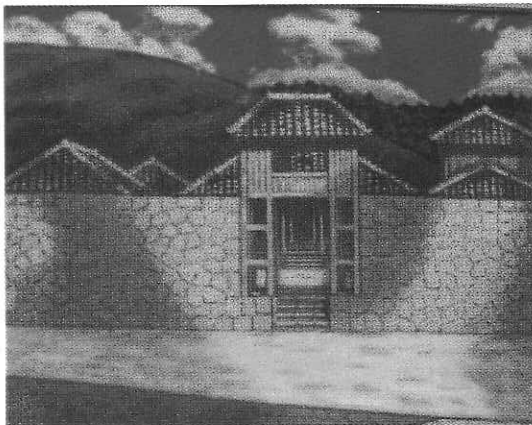
## ■ 旧蔵元復元画

蔵元とは宮古・八重山および久米島に設置された政庁のことで、首里王府の先島における行政上の重要な拠点であった。宮古島では弘治年間（1488～1505）に仲宗根豊見親が漲水に創設したといわれ、明治12年、廃藩置県にて在番制が廃止されるまで、行政の中核として重要な役割を果たしてきた。

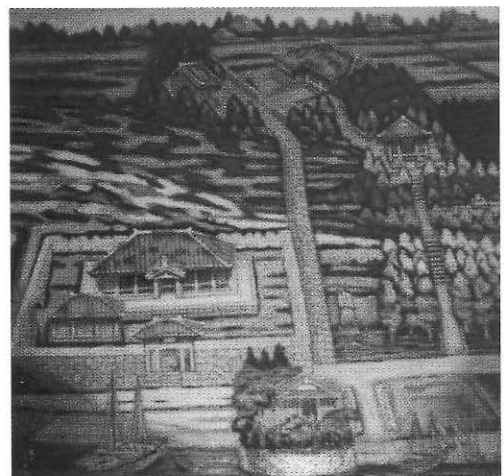
博物館所蔵資料である復元画に描かれた蔵元は、何度かの焼失と再建を経て、明治2（1867）年に再建されたもので、在番制廃止後も宮古島々庁が明治35年に移転するまで行政庁としての役割を果たし、その後も迎賓用の宿舎などに利用されていたようだが、明治40年に焼失した。この復元画を描いた宮原昌茂（1899－2006）は、宮古郡砂川間切下里村（旧平良市下里）出身の画家で、美術教師として教鞭をとるかたわら近代絵画を学び、光風会展（東京・京都）や沖展などに入選。戦禍や開発などで失われた宮古島の文化財の復元を提唱し、入念な聞き取り調査により旧蔵元復元画を描いた。当館には「旧蔵元行政庁と其の周辺図」「蔵元の石垣」「蔵元正面図」「観音堂並びに参道図」の4点が寄贈されている。旧蔵元は図面や写真など当時の資料が残っておらず、氏の回想画は宮古の歴史を紐解くうえで貴重な資料といえる。



▲ 観音堂 1976年



▲ 蔵元



▲ 蔵元とその周辺図 1991年



## 宮古史略年表

西 曆	日 本	中 国	事 項
1317	文保 元	延祐 4	婆羅公管下密牙古人 14 名、中国温州に漂着する。
1350	正平 5	至正 10	察度（30 歳）即位と伝わる。 14 世紀中葉・与那覇原と目黒盛が争うと伝わる。
1372	文中 元	洪武 5	中山王察度、はじめて明に朝貢する（使者王弟泰期）。
1388	元中 5	21	与那覇勢頭豊見親、白川浜より中山へ上る。
1389	6	22	中山王察度、朝鮮（高麗）と通好する。
1390	7	23	与那覇勢頭豊見親、八重山とともに中山へ初入貢。
1404	応永 11	永楽 2	明の公人時中冊封使として中山に派遣される（冊封の始まり）。
1406	13	4	第一尚氏王統始まる。尚巴志、父思紹を王位につける。
1420	27	18	中山王シャムに交易船を派遣する。
1429	永享 元	宣徳 4	中山王尚巴志、三山を統一する。
1470	文明 2	成化 6	金丸王位に就き、第二尚氏王統成立する。
1474	6	10	仲宗根豊見親、宮古島主長となると伝わる。
1477	9	13	尚真王即位する。 朝鮮人 3 名与那国に漂着。島伝い（～西表・波照間・新城・黒島・多良間・伊良部・宮古）に送られ首里を経て朝鮮へ送還される。
1500	明応 9	弘治 13	中山王府、八重山へ遠征してオヤケアカハチを討つ。 仲宗根豊見親、八重山での戦勝記念に漲水御嶽の石垣奉納寄進と伝わる。
1504	永正 元	17	宮古蔵設置されると伝わる。
1506	3	正徳 元	仲宗根豊見親、川満大殿に下地橋道を造らすと伝わる。
1513	10	8	金志川那喜多津、中山より大般若経 600 巻を求む。
1522	大永 2	嘉靖 元	与那国の鬼虎、仲宗根豊見親に討たれると伝わる。
1532	天文 元	11	この頃、金志川那喜多津、仲屋金盛に討たれると伝わる（大嶽城の変）。 仲屋金盛自刃し、豊見親の称号廃止される。
1567	永禄 10	隆慶 元	太平山の船、薩州加世田浦に漂着。島津氏修繕して送りかえす。
1592	文禄 元	万曆 20	豊臣秀吉、朝鮮侵攻のため琉球に賦役を命ずる。
1597	慶長 2	25	長真氏砂川親雲上旨屋ら中国より薩摩芋を持ち帰ると伝わる。
1609	慶長 14	万曆 37	薩摩藩島津氏、3 千名余の兵を発し琉球へ侵入する（慶長の役） 三頭制整う（平良・下地・砂川の頭）。
1611	16	39	薩摩藩、琉球（宮古・八重山を含む）の検地を実施する。 祥雲寺創建される。
1614	19	42	諸村に番所を設ける。

西 曆	日 本	中 国	事 項
1617	元和 3	45	薩摩、琉球に日本化を禁ずる令達を發する。
1628	寛永 5	崇禎 元	三間切（平良・下地・砂川）制度整う。
1629	6	2	宮古在番設置（初代喜舎場親雲上）される。
1637	14	10	宮古・八重山に人頭税制定める。
1647	正保 4	順治 4	この年、在番3人制になる。
1659	万治 2	16	宮古・八重山の貢租を一部粟、一部反布納とする。
1666	漢文 6	康熙 5	河充氏新里与人真善・忠導氏下里与人ら上国、医術を学ぶ（研修6年）。
1681	天和 元	20	宮古島造林始める（下地親雲上恵根、小松2千本を州鎌後に植える）
1685	貞享 2	24	蔵元を瓦葺きとする。
1686	3	25	川満・佐和田2ヶ村うまれる。
1699	元禄 12	38	観音堂建立される。
1707	宝永 4	46	『御嶽由来記』編さんされる。
1714	正徳 4	53	嘉手刈・大浦の2ヶ村うまれる。
1716	享保 元	55	野原・保良村の2ヶ村うまれる。
1727	12	雍正 5	『雍正旧記』なる（3間切30ヶ村）。
1729	14	7	宮古・八重山の役人に家譜編さんを許す。
1736	元文 元	乾隆 元	観音堂に経塚“経呪嶺”建立（白川氏恵道）
1748	寛延 元	13	在番筆者明有文長良友利の主の記した旧記を基にして『宮古島記事仕次』を編集する。
1752	宝暦 2	17	『宮古島記事』編さんされる。
1754	4	19	「白川氏正統家譜」編さんされる。
1757	7	22	「忠導氏正統家譜」編さんされる。
1766	明和 3	31	伊良部村から仲地、佐和田村から長浜、池間村から前里それぞれ分村し、与人・目差各1人おかれる。
1771	8	36	宮古・八重山大津波に襲われる。宮古の使者2508人、民家1079戸など被災する。
1780	安永 9	45	『宮古島在番記』なる。
1816	文化 13	嘉慶 21	イギリス海軍のアルセスト号来航（船長バジルホール）
1823	文政 6	道光 3	学校所を設ける。
1832	天保 3	12	3月5～14日昼夜暴風に襲われ67回大地震。
1836	7	16	干ばつ・暴風に襲われ大飢饉に苦しむ（死者数百人）
1848	嘉永 元	28	割重穀事件おこる
1852	5	咸豊 2	子年の大飢饉おこる（死者3千余人）

西 曆	日 本	中 国	事 項
1853	6	3	ペリー、艦隊を率いて琉球へ来航
1854	7	4	多良間騒動おこる（一名アコーメー事件）
1860	万延 元	10	落書事件おこる（波平前島尻与人捕らわれる）
1871	明治 4	同治 10	忠導氏平良大首里大屋子玄安ら、中山からの帰途台湾に漂着、54人惨殺される
1872	5	11	明治政府、琉球国を廃し琉球藩と改称し、政府直轄とする。
1873	6	12	ドイツ商船ロベルトソン号宮国沖で遭難、救助される。
1874	7	13	福里・西原に2か村うまれる。
1875	8	光緒 元	平良の学校所南北二校となる
1876	9	2	ドイツ皇帝、クヤモーに「博愛記念碑」建立。
1878	11	4	清国、琉球問題で明治政府に抗議する。
1879	12		明治政府、琉球藩を廃して沖縄県を設置。 宮古在番撤廃。警視派出所を設置。 サンシー事件おこる（下地仁屋利社殺害）。 宮古・八重山分島問題おこる。
1880	13		沖縄県宮古島役所を蔵元に設置。
1882	15		南北二校を合併して平良小学校を創立、普通教育 はじまる。 宮古島郵便局、蔵元内に設置。
1888	21		甘藷栽培制限令廃止される。
1892	25		人頭税撤廃運動おこる。翌年代表4人上京、帝国議会で請願、
1894	27		名子制度廃止される。 日清戦争おこる。
1896	29		宮古島役所を宮古島庁に改める。
1897	30		三間切制（平良・下地・砂川）を廃し宮古一間切一郡となる。
1902	35		宮古・八重山に徴兵令施行される。
1903	36		人頭税廃止、地租条例実施される。
1904	37		日露戦争おこる。
1905	38		久松の5人の漁夫、八重山電信局から「敵艦見ゆ」と打電。
1906	39		池間でカツオ漁はじまる。
1908	41		特別町村制施行される。宮古は平良・城辺・下地・伊良部四村となる（多良間は平良村）。
1909	42		県制施行にともなう初の県議会選挙。大村寛城・平良恵昌当選
1913	大正 2		仲筋・塩川・水納三字、平良村から分離、多良間村うまれる。 那覇～宮古間海底電信開通。
1914	3		第一次世界大戦おこる。

西 暦	日 本	中 国	事 項
1914	3		平良・城辺・下地三村道路開通する。
1915	4		「宮古朝日新聞」創刊と伝わる。
1918	大正 7		宮古電燈株式会社送電開始する。
1920	9		初めての国会議員選挙。立津春方、盛島明長ら立候補する。
1922	11		宮古郡水産会設立。
1923	12		宮古郡織物同業組合設立。。
1923	13		平良村、町制を施行する。 工場による酒造業おこる（西里、野村安重）。
1925	14		宮古神社建立。
1926	15		沖縄県宮古島庁、宮古支庁と改称。
1927	昭和 2		慶世村恒任『宮古史伝』を著す。 宮古郡マラリア防あつ所設置される。
1928	3		普通選挙によるはじめての総選挙。 沖縄県立第二中学校宮古分校開校する。翌年、宮古中学校に独立昇格する。
1931	6		らい療養所として県立宮古保養院開所。
1932	7		造船業はじまる（下里布干堂、久津輪）。
1934	9		『平良町制 10 周年記念誌』刊行する。
1936	11		第 19 回衆議院議員選挙（盛島明長、三位）。 宮古高等女学校開校（1940 年県立へ。）
1937	12		日華事変おこる。 宮古島測候所開設する。
1939	14		宮古・那覇間に無線電話開通。
1941	16		新聞戦時統一で一県一紙となり宮古・八重山は各島一紙となる。 「宮古朝日新聞」創刊。 日本、米・英等に宣戦布告する（太平洋戦争はじまる）。
1943	18		陸海軍用飛行場の用地収収はじまる（七原・屋原・クイズ）。
1944	19		米軍による初めての空襲（10・10 空襲）。
1945	20		米軍、沖縄本島へ上陸。沖縄、戦場となる（死者 20 余万人）。 英太平洋艦隊、宮古島を艦砲射撃する（5.4）。 第二次世界大戦日本の敗戦で終わる（8.15）。 沖縄はアメリカ軍統治下に入る。
1946	21		マッカーサー、日本と南西諸島の分離を宣言する。 通貨日本旧円を新円に切り換える。 宮古郡会開設する。

西 曆	日 本	中 国	事 項
1947	22		平良町、市に昇格する。 宮古支庁を宮古民政府に、支庁長を知事に改称する。 日本国憲法施行。沖縄は適用されず。 城辺村、町に昇格する。
1948	23		戦後はいじめて市町村長公選される。 宮古民政府立図書館開館。 通貨をB円に切り換える。 下地村から新里・宮国・野原などが分離して上野村うまれる。
1949	昭和 24		下地村、町に昇格 本土・沖縄間旅券（パスポート）発効はじまる。
1950	25		朝鮮戦争はじまる 四群島知事並議員、初めての選挙。
1951	26		マッカーサー解任される。 琉球臨時中央政府創設される。 平良市三大事業（電気・水道・港湾）。 サンフランシスコで対日講和会議開かれる。 日米安全保障条約調印される。 日本復帰運動強まる。
1952	27		初めての立法院議員選挙施行。 琉球政府創設される。 対日講和条約発効。 宮古琉米文化会館開館。 宮古地方庁設置される。
1953	28		奄美群島日本へ返還される。
1954	29		アイゼンハワー大統領、一般教書で沖縄基地無期限保有宣言。
1955	30		平良市三大事業竣工記念式を挙る。 台風クララ襲う。死者・行方不明 5 人、住家全半壊 1067 戸、 非住家全半壊 1842 戸。 先島民間航空CAT 処女飛行。
1956	31		沖縄土地を守る総連合会結成。
1957	32		台風 14 号フェイ襲う。瞬間最大風速 60.3 m、死者 6 人、住家 全壊 1035 戸、半壊 1257 戸。 稲村賢敷『宮古島庶民史』を著す。 ムーア中将、初代琉球高等弁務官に就任。 通貨B円をドルに切り換える。

西 曆	日 本	中 国	事 項
1959	34		台風 14 号サラ（宮古島台風）襲う。最大瞬間風速 64.8 m、最低気圧 908.4 ミリバール、死傷者 90 人、住家全壊 2849 戸、半壊 2685 戸。
1960	35		沖縄県祖国復帰協議会結成。 新日米安全保障条約成立。
1963	38		70 年来の大かんばつ。サトウキビ 60%の減収。
1965	40		宮古島上水道組合設立。 製糖会社三社合併問題否決される。 佐藤首相一行来郡。
1966	41		台風 18 号コラ（第 2 宮古島台風）襲う。最大瞬間風速 85.3 m、住家全壊 2786 戸、半壊 4756 戸。
1967	昭和 42		教公二法案廃案となる。 第二次佐藤・ジョンソン共同声明「沖縄返還は両 3 年以内にメド」と発表。 OHK（沖縄放送協会）テレビ宮古放送局開局。
1968	43		台風 16 号デラ（第 3 宮古島台風）襲う。最大瞬間風速 79.8 m、家屋全半壊 238 戸。 はじめて行政主席公選される（屋良朝苗当選）。
1969	44		沖縄～宮古・八重山間UHF（超高周波数）開通。 佐藤・ニクソン共同声明「1972 年沖縄返還」で合意する。
1970	45		宮古地方庁を宮古支庁に改める。 戦後初めての衆参両院議員同時選挙。
1971	46		6 ヶ月にわたり異常干ばつ続く。サトウキビ 90%枯死。 宮古・伊良部・宮多三製糖会社合併し、宮古製糖株式会社設立 「沖縄返還協定」東京とワシントンで調印する。
1972	47		沖縄、本土へ復帰する。